



発行所  
 一般財団法人  
 広島県動員学徒等犠牲者の会  
 事務局  
 広島市南区比治山本町12-2  
 広島県社会福祉会館内  
 〒732-0816 電話 (082) 252-0316  
 印刷所 Taisei  
 デジタルブック  
 “慟哭の証言”  
<http://www.douingakuto.com/>

# 第63回原爆死没者追悼式を挙

昭和32年2月に当会が設立され、その年の10月に第1回の慰霊祭が挙行されてから63回目となる原爆死没者追悼式が、8月6日9時から動員学徒慰霊塔前広場で、遺族、来賓、代表校生徒など約250人の参列により厳かに挙行されました。小雨が降る中、静かにご冥福を祈る式となりました。

## 式 辞

理事長 井上 公夫

本日、ここに、多数の御遺族の皆様、御来賓の皆様をお迎えして、第六十三回目の原爆死没者追悼式を挙行するに当たり、動員学徒・女子挺身隊員として出動中被爆し犠牲となられた七千有余名の英霊に対し、深甚なる哀悼の誠をささげるものであります。

本日参列されている崇徳高等学校の生徒さんと同年代のその当時の中学生・女学生は、当時建物疎開あるいは軍需工場での作業に従事しておりました。

労働力が不足する中「君知るや学徒百万祖国こそ生くる命と打ち捨てぬペンもノートも」と国のためにな

るのだと喜び勇んで学業を置き、ひたすら国の使命に殉ずることに大きな誇りを持って頑張っていたのであります。

昭和二十年八月六日、広島市中心部六百メートルの上空で炸裂した原爆により、広島市は一瞬のうちに塵芥に帰し、すさまじい熱線と放射線と爆風の中で悲惨な状況を迎えました。

崇徳高等学校の前身である崇徳中学校においても、建物疎開作業において多数の職員・生徒さんが、犠牲となっておられます。

戦後七十年間は草木も生えぬといわれた広島地ではありますが、昭

### 目 次

第63回原爆死没者追悼式式辞	1
同 追悼のことば	2～3
家族の思い出	4
寺前さんの伝承講話	5～7
平和への祈りコンサート	7～8
広島県知事表彰受賞	8
寄付のお礼	8
あとがき	8

和・平成の時代を経て、見事にがれきの山の中から力強く復興・発展し、今日の繁栄を迎えております。

しかし、私たちは、今享受する平和と繁栄が、多くの方の尊い犠牲の上に築かれていることを決して忘れることはありません。

現在、被爆者の平均年齢は、八十二歳を超え、高齢化が進み、被爆体験を語ることでできる方が少なくなってきています。

残された時間が、だんだんと少なくなる中で、過酷な被爆の体験や平和への願いを、明日を生きる若い世代に引き継ぎ、共有化しなくてはなりません。

私どもの会は、被爆体験の継承を進める目的で、これまで、体験記を文集「慟哭の証言」として発刊し、ホームページにも掲載するなど様々な活動を行っております。

あの時を、思い出すのはつらいことです。

しかし、今改めてあの日を振り返り、戦没者の方々の犠牲を尊い教訓として心に刻み、今後とも「核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現」に向けて、戦争の悲惨さと平和の尊さを末永く語り継いでまいります。

本日の式典に際し、御遺族の皆様、並びに、ご臨席を賜りました御来賓の皆様にお礼を申し上げます。御来賓の皆様、動員学徒の御霊に永久の安らぎと、ご遺族の皆様へご冥福を祈ります。



## 追悼のことば

広島県知事

湯崎 英彦

本日ここに「第六十三回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり、県民を代表し、謹んで追悼のことばを申し上げます。

顧みますと、あの忘れることのできない日から、七十四年という歳月が過ぎ去りました。

人類史上初めて使用された原子爆弾は、この慰霊塔の上空で炸裂し、一瞬にして広島を焦土と化し、無限の可能性を秘めた動員学徒や女子挺身隊の方々に始めとする、多くの尊い生命が失われました。

祖国の発展と安泰を願い、建物疎開などに従事中に亡くなられた余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを推しはかる時哀惜の念、胸に迫るのを禁じ得ません。

また、最愛の我が子や肉親を失われた御遺族の皆様には、長い間言葉に尽くせない深い悲しみと多くの困難を乗り越えてこられたところであり、その間の御心労と御努力の程は、察するに余りあります。

私たちは、先の大戦の体験から、「あやまちは一度と繰り返しません」と固く決意しました。

しかしながら、戦後生まれの世代が大多数を占める中、戦争体験、被爆体験の風化が懸念され、一方では、今なお、恒久平和と核兵器廃絶への道のりには険しいものがあります。

こうした今こそ、原爆の惨禍を乗り越えた「ひろしま」には、「核兵器のない世界」に向けた強い思いを、国際社会と共有し、平和と安定の実現に向けて、努力して行く責任があると考えます。

そのためにも、戦争の悲惨さや、そこに幾多の尊い犠牲があったことを次の世代に語り継ぐとともに、国の内外に平和の大切さを強く訴えつづけていかなければなりません。

そしてこの二十一世紀を、誰もが心豊かに暮らせる、より良い社会とするため全力を尽くしていくことを、お誓い申し上げます。



参列されたご遺族・ご来賓

終わりに、犠牲者の方々の御冥福と御遺族の皆様のお祈りを、心からお祈り申し上げます。追悼のことばといたします。

広島市長

松井 一實

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第六十三回原爆死没者追悼式が執り行われるに当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

七十四年前の今日、動員学徒、女子挺身隊員として、ひたすら我が国の安泰を願い、軍需工場での作業や建物疎開作業に従事されていた多くの方々が、一発の原子爆弾によって若くしてその尊い生命を奪い去られたことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛の肉親を亡くされた御遺族の皆様におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと御拝察申し上げます。

今日の我が国の平和と繁栄はこうした尊い多くの犠牲の下にあり、同じ思いをする子供たちを生み出さないためにも、二度と悲惨な戦争を繰り返してはなりません。しかし、時の経過に伴い被爆者の高齢化が進み、被爆体験が風化することや次世代に平和への思いが継承されないことを危惧しております。このため本

市では、平成二十四年度から、被爆者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、伝える「被爆体験伝承者」の養成に取り組んでおります。活動を開始してから八年目を迎え、現在、百三十名を超える方々が被爆体験伝承者として平和記念資料館や国内外の学校などで活躍されております。さらに、今年度から高校生や大学生が平和記念公園を訪れる外国人に被爆の実相を英語で伝えるボランティアガイド制度も創設し、次世代を担う広島県の青少年自らが平和の大切さを学ぶとともに、海外から訪れる人々に英語でヒロシマの心を伝える機会を設けることとしています。

こうした一つ一つの取組を大切に、世界恒久平和にまい進する決意を新たに、戦没者の方々の犠牲を尊い教訓として深く心に刻み、戦争の悲惨さと平和の尊さを末長く後世に語り継いでまいります。

終わりに、御霊のとこしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族の皆様のお健勝を祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

崇徳高等学校

宇野 雄大

本日は第63回広島県動員学徒等犠牲者の会原爆死没者追悼式に参列さ

せていただき、生徒を代表して謹んで追悼の言葉を申し上げます。

若人の学びが将来の国を支える礎になるからこそ、今私たちは多くのおとなたちに支えられて学ぶ機会が与えられ、時代を担う人材として社会で活躍する準備を行っています。青春と呼ばれるこの時期は、人生において最もかけがえない時であり、1日1日を大切に大切に過ごすべき時です。その貴重な時間を二重に奪われた先輩方のことを考えると、ただただ胸が痛むばかりです。私たちが崇徳高校の先輩方をはじめ広島市内の多くの学生たちは、貴重な学びの時間を犠牲にして、動員学徒として勤労を国から強いられました。しかし、先輩方は、父や母、兄弟姉妹、同胞のためと考えて、献身的に勤労に従事されたと同っています。

ボロに破れたままそこから避難されることになりました。この方面の捜索に当たった保護者などの体験によると、国道の至る所に先輩方が倒れていらつしやり、すでに絶命された方、あるいは息絶え絶えに水を求め、救いを呼ばれたがどなたかを識別することはほとんどできない方ばかりだったそうです。かろうじて着衣の破片や革バンドによる判別で、ごく少数の方が保護者などの手によって収容されたに過ぎませんでした。なお、当時この方面に出動していて、生存が確認されている方は二・三名に過ぎず、引率教師も生存者がおられず、今もって当時の実状を把握することは困難です。しかし、平成6年に崇徳学園が実施した再調査によると、八丁堀付近では407名の先輩方が犠牲となり、教職員7名は全員が亡くなっています。他の場所では作業に従事されていて犠牲になった先輩方を合わせると、512名の尊い命が失われており、男子中等学校生の中では、崇徳中学校の犠牲者が最も多かったそうです。

先輩方は、国と原爆によって、学ぶ機会を、生きる機会を失ってしまいました。当時の日本の指導者の誤った判断により、あまりにも悲惨な結果が引き起こされたのです。本来なら、子どもたちを導き支え、自分たちが踏み台になって若者を送り出さなければならぬはずのおとなたちの都合によつてです。この春、私たちは広島市内で原爆のために亡くなられた学徒動員の方々の慰霊碑を巡り、一人ひとりのお名前が書かれた石碑を見ました。石碑の一面に掘り刻まれている名前の多さに圧倒されるとともに、お名前のある一人ひとりの人生が一瞬にして奪われたことを考える時、このような過ちが決して繰り返されてはならないと改めて決意する時間となりました。私たちは、今自分たちにできることをしっかりと考え、一つ一つ行い、核のない、子どもや若者がのびのびと学び育っていける社会を創り出していくことを誓います。



崇徳高等学校生徒代表 宇野雄大さん

最後にになりましたが、犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を表し、ご遺族のご多幸を心より念じ申し上げます。追悼の言葉とさせていただきます。

### 第63回原爆死没者追悼式

式次第

- 一、開会の辞
- 一、国歌斉唱
- 一、黙祷
- 一、式辞
- 一、来賓追悼の辞（敬称略）
  - 広島県知事 湯崎英彦
  - （代読）健康福祉局社会援護課長 熊野 智
  - 広島市長 松井一實
  - （代読）健康福祉局保健部 市立病院担当部長 白石一行
  - 一、学校代表生徒の追悼の辞
    - 崇徳高等学校 生徒代表 宇野雄大
    - （衆議院議員） 岸田文雄 平口 洋 河井克行
    - 新谷正義 寺田 稔 佐藤公治
    - 小林史明 小島敏文 斉藤鉄夫
    - 枝野幸男 玉木雄一郎 泉健太
    - （参議院議員） 宮澤洋一 森本真治 河井案里
    - 谷谷正明 山本博司
    - （広島県議会議員） 下西幸男 辻 恒雄 中原好治
    - 緒方直之 山下智之 佐藤一直
    - 竹原 哲 砂原克規 福知基弘
    - 石橋林太郎 山木茂
    - （広島市議会議員） 八條範彦 山本昌弘 八軒幹夫
    - 三宅正明 並川雄一 椋木太一
    - 吉瀬康平 元田賢治 伊藤昭善
    - 海徳裕志 定野和広
    - （広島市遺族会） 副会長 中島百合枝
    - （広島護国神社） 権祢宜 後藤哲史
    - （崇徳高等学校） 教諭 住吉 薫
    - 一、閉会の辞

# 家族の想い出

小川 九人雄

動員学徒の慰霊碑の前に立つと、多くの学徒が犠牲となって亡くなったという事が、今では信じられない程きれいに清掃され、四季の花が供えられ、厳かな雰囲気醸し出されています。

原爆投下当日の昭和20年8月6日は、私は五才で爆心地から一・八キロの所に両親と九人の兄弟で住んでいましたが、長男、二男、三男は出征し家にはいませんでした。朝食後すぐ上の兄と二人で塀の陰で遊んでいた時に、突然の閃光と爆風で十メートル位吹き飛ばされました。私は運良く陰にいたお蔭で、カスリ傷程度ですみました。

倒壊しなかった我が家に、傷の手当てや、飲物、食物等を求めて、近所の人たちが三十人位やって来ました。人々のウメキ声や、更に傷が深く息絶えだえの人の声等が重なり合って、家の中は修羅場でした。また、家具も倒れ、土壁、ガラスの破片等がいたるところに散らばり、足の踏み場もない異様な光景でした。

姉で長女の良子は山中高女に行っていました。当日は早くから江波の工場へ動員学徒で出かけたが、土橋の電停で待合せていた仲

良しの級友が来ないので、一足早く電車に乗り、江波に着いた時に被爆しました。周囲が暗黒の世界になったので、近くに爆弾が落ちたと思っただけです。あたり一面建物が崩壊しケガを負った人々が、中心部から続々と押し寄せて来ましたが、姉は自宅のある北の方向を目指して約七キロ位を歩き、夕刻になってやっとたどり着いた。姉はカスリ傷程度で済んだが、日陰にいたのでケロイドにならなくて良かったと言っていました。しかし、仲の良い友とは、その後土橋の電停で別れて以来ずっと消息不明のままと聞かされた。

姉は動員学徒の友と手を携えて、爆風で瓦礫の道をやつとの思いで我家に辿りついたが、その後、多くを語らなかつた。やはり人々の衣服がボロボロになり、着ている人も人相が大きく変わり、男女が分からない位の人を見て、大きなショックを受けたに違いないと思う。

その後は、母を手伝い、弟で五男の大火傷の看病をしながら、家事で兄弟の面倒を良く見てくれた。八十七才まで元気に過ごした。

四男隆司は、広島県立商業の三年生で、当日はたまたま動員学徒の夜勤明けで自宅にいましたが、二階の階段を降りている最中に被爆し、一階まで叩き落とされたがケガなく、壁土やガラスの破片等を取り除いた

り、また食物の世話や近所の人の傷の手当等、一番の頼りがいのある青年として、重宝がられたと言っていました。兄も平常通りの動員であれば街中で被災しケガをしてどうなっていたか分からないと、いつも我が身の幸運を喜んでいました。

それに引き換え、五男の晋吾は疎開学徒動員で、肩と背中に大ケドを負い、自宅に昼過ぎに帰宅した。開学動員で、肩と背中に大ケドを負い、自宅に昼過ぎに帰宅した。着ているものはボロボロで重傷であった。薬とか包帯とか満足になく、浴衣で肩や背中を被って、僅か残っていた薬を塗布するのみで、二ヶ月間位呻吟しました。その間家族総出で看病にあたりましたが、肩と背中にケロイドが残りました。戦後の物のない時代に薬と食物を求め、母や姉、兄達が、東奔西走し集めたものでは、十分に満足のいく治療も、食事も与えられなかつたと思う。

私の心の中には父と母の最期も鮮明に記憶されています。父は、ガラス片で肩に裂傷を負いその月の28日に亡くなり、母は腸捻転で、20年の12月26日に日赤病院で不運の死を遂げたということであった。母の死は父の死よりも一番悲しかった。私の人生が大きく変わった事であった。

我が家において、両親の死や姉や兄たちが被爆し負傷した中での僅かな救いは、自宅が倒壊を免れた事

と、長兄達が戦地や国内の部隊から帰宅して、大勢の兄弟で助け合って暮らした事ではなからうか。

姉や兄の学友達が、学業を諦め、動員学徒という苛酷な労力を強いられ負傷し更に亡くなるという、人生の中でも青春の一番多感な時を無為に過ごした事をどのように感じたかは、私には理解できません。当時五才の私には兄や姉の辛い思い出や、友や家族を失ったという心の中まで、推測は出来ません。

今なお軍拡や核の研究開発にあけられる世界の首脳達に、過去の悲惨な実状をとくと見てもらいたいと思う。

昭和の時代は遠くなり、戦後生まれの人が大多数を占める時代になった。今一度立ち止まって、戦争とは何か、核とは何か、と問い詰めて、一人一人が考えなくてはならない。第二次世界大戦の遺跡とかと言われたら、あの時代に動員された犠牲者には、全くたまらないと思う。平和な生活がずっと続くことを願うのみであります。



## 青山学院大学での 「寺前さんの伝承講話」

辻 靖司

2019年7月11日(木)に、新春の大学駅伝で有名な青山学院大学を訪問して、「被爆者寺前さんの伝承講話」をいたしました。青山学院大学でなぜ、私が伝承講話の機会を得たかといいますと、約10年前に同大学の准教授の方を、平和記念資料館内と碑めぐりにご案内しておりました。その後も准教授の方は、私の伝承講話活動の研修期間から関心を持たれて、私の取り組みに注目しておられました。また、この准教授の方は、数年前に当会の清掃活動やその後の読経にも参加された事があります。そういった准教授からのご依頼でこのたび講話をさせていただきますこととなりました。

このたびの私の「寺前さんの伝承講話」の概要などは、次のとおりです。

### ○講話内容の概要

15歳の女学生が動員学徒中に左目を失明、右目周辺にも大きな傷が残る大怪我をしながら、また、放射線障害で4つのガンと闘いながら、戦後74年間を元気に生き抜いてこられ、また、「動員学徒慰霊塔」の建立や、継続的な清掃、献花、機関誌の発行などの、広島県動員学徒等犠牲者の会(以下「学徒の会」と

いう。)の活動にも、率先して取り組んでおられる。そして、89歳の現在でも、車椅子を利用して被爆体験証言活動に取り組んでおられる。

(私の「寺前さんの伝承講話」の内容につきましては、本誌(123号(2015・11・30)～126号(2017・6・30))に詳細を掲載しましたので、今回の講話内容の詳細は割愛させていただきます。)

### ○講話の最後の結びの模様

私が最後の結びとして、「私の講話の中から原爆被害の実態や放射線被害のことなど、家に帰ったら家族や友人にお話をしていただきたいのです。この事は立派な平和継承の第一歩になります。家族や友人にお話をしてくれませんか?」と問いかけると、学生の約95%の挙手がありました。

「それでは意地悪な質問をします。話してくれない人は挙手をお願いします。」と問いかけると、挙手は0%で数十人の方々から素敵なスマイルがありました。この事は感動でした。東京の学生さんにもしっかりと平和の大切さは伝わったと思いますし、とても充実した伝承講話活動の時間を持てました。

### ○学生からの質疑に対する応答模様

今回の講話は、「被爆体験のない者が被爆者の証言講話を引き継いで講話をすることが出来るのか?」

といった大きな課題のテーマに取り組んでおられる学生を対象にした伝承講話でしたので、講話後の30分間の質問も、この事に関連した次のような熱心な沢山の質問を受けました。

1 なぜ、伝承者になることを目指したのか?

① 私は定年後、資料館館内、碑めぐりのご案内の活動に取り組みている。被爆者証言をしながら、館内や碑めぐりのボランティア活動に取り組みでおられる大先輩も沢山おられる。その方々の被爆者証言を引く継ぐ活動で一緒に勉強することは、自分自身の大きな知識の拡大にもつながると思った。また、伝承をする大きな責務もあると思った。

② 被爆体験証言者(以下「証言者」という。)の高齢化が進み証言講話が聞けなくなることは、今後の大きな問題だと思った。広島市が計画した伝承講話活動にとにかく参加して、精一杯取り組みたいと思った。

2 伝承する上で大事にしていること、大事だと思ふ事は何でしょうか?

① 証言者が語られる証言で、何を訴えながら核兵器廃絶に結びつけることを話されているか、その熱い思いの語りを第三者の自分が語り継いでいるか?また、その

私の伝承講話の熱い思いが聴講者に伝わっているのか?いつも自分に課せられた課題であり、自問自答しながら取り組んでいる。

② 証言者の方との研修活動を通じて学徒の会でメンバーの一人として活動をしているが、証言者の方が体調面で継続出来なくなれば、このような活動も継続して活動が出来るように引き継がないといけない責務を感じている。

③ 証言者の方が、亡くなった学徒の家族と一緒に取り組んでおられる動員学徒慰霊塔の清掃活動や供養の読経、機関誌発行の編集といった学徒の会の活動にも取り組んでいる。

3 体験していないことを話すという事は、辻さんにとってどういう事か?

① 被爆体験のない私には大変な事である。証言者が、証言で何を訴えながら核兵器廃絶に結びつけることを話されているか、その熱い思いの語りを良く理解すること。証言者のお話を良く理解すること。避難経路など、どのような思いで、その時にどんな体調で歩かれたのか?この点も一緒に歩きながら良く理解することも重要な事だと思ふ。

② そのように考える私は3年間の伝承講話研修終了後も、被爆者の方と行動を共にするように努

力し、その時の生活の様子を学んだりしている。証言者が取り組んでおられる活動である「動員学徒慰霊塔の清掃や献花」「お寺さんでの読経」「学徒の会の会報発行」「金輪島慰霊碑のご一緒の参拝」「避難時にご一緒に逃げた恩師の慰霊祭」「母校の原爆死没者慰霊祭」などにも行動を共にして知識を深めている。

③ 「被爆体験証言者のお誕生日会」や「懇親会・カラオケ会」なども開催しながら、懇親を深めながら知識を深める活動に努力している。

4 証言者の伝承の意義は理解出来ました。次は辻さん達の伝承を引き継ぐ活動が必要なのではないでしょうか？

① 全く同じ意見で今後の大きな課題だと思っている。今後、事例を上げて広島市の関係者に問題提起をしたいと思う。

② 伝承者養成期間は3年間である。この3年間の研修中に講師の立場の証言者の方が他界される悲しいことがある。このような場合、証言者生存中に伝承文をパスさせている状況であれば、伝承者としてデビューすることが出来る。そうでない場合は、それまでの長年の苦勞が「水の泡」となり、涙を流した伝承者が沢山おられる。

5 被爆したお兄さんのエピソードなどは？

① (私は9人兄弟で)被爆した兄は17才年上で20才の時に1.2kmの至近距離で被爆した。

② 広島県では優良企業の会社員として勤めていたが、29才の頃に退職した。恋愛や上司との仕事については、年令も離れており理由は良く聞いていない。

③ 27〜38才頃までお見合いのお話は沢山あったようだが、いつもまとまらなかったようだ。(今、考えてみると被爆していることも一因であったように思う。)

④ 兄は、休日には「しんどい、しんどい。」と言いながら横になっていることが多く、朝からお酒を飲んでいて。16〜20才の私には理解が出来なく「お兄ちゃんはだらしがない！お母さんが注意しなさい！」と母に何度も言ったが、私の意見を母は無視していたような状況であった。

⑤ その後、兄が朝昼晩とお酒を飲む日々が続いたが、私は何も言わなかった。多分兄は、当時は自分では長生きは出来ないと思っていたと思われる。

⑥ 兄は39才の頃、お見合い結婚をして、元氣な健康な男の子に恵まれた。兄は、82才の時に食道ガンで他界した。

## 6 その他の質問

(30分の質問後、学生さんが講話の感想を記述していたので、何か質問はないか机をまわりながら、学生さんにお聞きした。)

① 寺前さんの恩師である脇田先生のお兄さんが大切に持っていた新聞記事には何が記述してあったのか？

平成9年1月3日発行の中国新聞へ「私の尊敬する人・わが身願みず被爆時の恩師」の先生への感謝の記事を説明しました。

② 伝承者になるために3年間勉強して、その後のパスの条件はどんなことか？

約9,000〜10,000文字の伝承文を作成、市の関係者と被爆証言者の審査でパス後、講話訓練のリハーサル後、OKならその後伝承者としてデビューします。

③ パワーポイントで使っていた「動員学徒慰霊塔」は特長のある形状であるが、設計者の込められた意図はあるのか？

御霊を追悼するための設計者の熱い思いが込められています。高さ15mの五重塔の逆三角形の塔は中心柱の先端を折れた形になっている。これは青春学徒が勉学半ばで犠牲となったこと。将来の大きな夢を持って伸びんとする若者が挫折した意味を表現している。女神像は多くの犠牲者の中には色々の宗教の方もあるので、観音像とマリアのお

姿とがよく調和したご本尊にしてある。お顔は観音様に頭部に宝冠の仏教を表現、背のエンゼルの羽はキリスト教を表現、ベルト辺りは神道を表している。手には英霊の花を持ち水々しい慈愛に満たされたお姿を表現している。塔は平和の象徴である鳩のバランスを考えて八羽の鳩を止まらせ、亡き学徒の御霊を静かに平和になるように願って見守っている。

また、慰霊塔の敷地について、「原爆ドームの南地にドームと河岸とのコントラストを考えて、地上より150cm掘り下げて建立している。

これは原爆ドームを望んで被爆当時をしのびながら緩やかな坂道を下り、慰霊塔の前では原爆ドームや元安川沿いを歩く人を視野の外に置いて気持ちを煩わされず静かに参拝して御霊を追悼出来るようにという場所の確保の配慮からである。石段が寄付されたのは1年後の昭和43年8月のことである。」と追加説明をした。

○ 今回の伝承講話活動で私の感じたこと

① 熱心なご質問を沢山受けたので丁寧詳しく対応をさせていただきました。質問の時間もしっかりと確保してありましたが、大勢の聴講者の前では質問の出来ないう方もおられるように思いました。(私の若い時もそのような時

期が長期間ありました。)今後の伝承講話活動では、貴重な質問が積極的に発言出来るような雰囲気づくりや今回のような積極的な聴講者に聞いて歩くことなども工夫しながら、より一層充実した伝承講話が出来るように取り組みたいと思います。

② 私の伝承講話は5年目の活動であるが、昨年から青森県や栃木県など県外の活動に広がっていることは、私も伝承者として活動の意義や達成感を持てる活動で充実した時間を持っています。

③ 学生さんの聴講態度に関心がありませんでしたが、約170名の学生さんも顔を私に注目して最初から熱心にメモをしながらの聴講姿勢でした。質問項目も上記に記述の通り伝承講話の本質に迫る私自身も永遠の課題として取り組んでいる熱心な質問が沢山あり、達成感を持って伝承講話活動が出来ました。

④ 講話の会場も聴講者の後席が高く傾斜の机と椅子の300席、PC画像も2画面、スポットライト付き演台、ペンタイプの軽い小型マイクなど、設備も充実しており、気持ち良く充実した講話が出来ました。

⑤ 大学での伝承講話は、今年5月のロシアのボルゴグラード大学、今回の青山学院大学の2回のみ

であるが、今後は広島市内や県外の大学での伝承講話をする機会が広がるように願っています。

⑥ 私へ伝承講話依頼をされた准教授からも「学生にとつて、とても貴重な体験になったと思います。特にこの授業が伝承をテーマにしていることもあり、伝承者の辻さんからお話を伺えたことで、沢山の考えるポイントをいただいたのではないかと思っております。心より感謝申し上げます。」との、今後の活動の大きな励みと自信になる嬉しいコメントもいただきました。

⑦ これまで、小中高校生を対象にした講話の機会も沢山あり、充実した活動が出来ていることを感じていましたが、今回のことで、県外の大学生まで、伝承講話を通じて平和の大切さは、しっかりと浸透していると感じました。

## 「平和への祈り」 「コンサート」に 行ってきました

三木 島彦

9月15日、日曜日、第二回「平和への祈りコンサート」が開かれました。今年の会場は、クラシックのこじんまりとしたコンサートによく利用される東区民文化センターの

小ホール(「スタジオ1」)です。観客はチケットが完売で、招待のひとを含めて130人ほどです。去年に引き続いて、主催者側の希望で、コンサートの副題はその趣旨を反映させて「動員学徒犠牲者に捧ぐ」とされています。チラシのはじめに「あの戦争で、国のために勤労活動に従事し、それでも未来を見ようとしていた多くの若い命が失われました。その一人一人の愛すべき魂に寄り添いながら、音楽を捧げます」と書かれています。

最初の曲の演奏の後、出演者の一人の三木冬子(私の姉です)が挨拶をしました。動員学徒碑の存在をみんなに知って欲しいと、みんなに語りかけます。本人は動員学徒犠牲者の会の井上公夫理事長の姪で、母親が広島で被爆した被爆二世です。原爆の話聞かせてくれた母や祖母はすでに亡くなりましたが、長くこの会の活動に参加していました。祖母の息子、母の弟である叔父が旧制広島市立中学校(現広島基町高校)の生徒で、強制建物疎開の作業中に被爆死している遺族です。当日のプログラムでは副題にさらに「仲間とともに」と言葉が添えられました。それは曲の選び方に反映されていますが、実際に国泰寺中学(出身の小学校は袋町、千田、竹屋といろいろです)の同級生のひとたちの協力で成し遂げられたコンサートでした。

プログラムはクラシックに限らずいろんな分野にわたっていて、特色のあるところではポップスの嶋田トオルさん(紅白にも出た「サーカス」というグループのボーカルでした。この人はあとで言及する日野さんと同様、千田小学校の同級生)が出演して、さだまさしの「たいせつなひと」を歌っています。楽しい内訳話、トークショーなども間に挟みました。全体が挨拶の中でも「音楽の宝箱です」と紹介された通りの内容だと思えます。

1. 涙の流れるままに ヘンデル

三木冬子のヴィオラと同級生の日野葉子さんのピアノの二重奏です。ピアノの音が澄んでいて、ヴィオラの豊かな音が盛り上がり、最初に強い印象を受けました。良かったです。ヘンデルは小学校の音楽室の肖像画の一人で、名前は子どもの頃から覚えていた人が多いと思います。これから古典のどの曲についても言えるのですが、テレビのコマーシャルやドラマの背景に流れていて名前は知らなくても、曲を聞くと子供の頃のいろいろな思い出が同時に脳裏に蘇ってくるかもしれません。よく知られているほかの日本語の題名は「私を泣かせてください」なのですが、この題名のほうが悲境を嘆くヒロインの心が具体的にイメージできそうです。立場や状況は違っても、また自分の身の

にはそんなドラマチックなことはありえないと思うのですが、泣きたくなるようなことはありますから。

2. 我が母の教えたまいし歌  
ドボルザーク

題名が好いです。題名だけで涙で目がうるうるになりそうです。ドボルザークは下校時に流れる「遠き山に日は落ちて」（「家路」）の旋律が誰の心にも思い出として残っています。こちらも似ているというわけではなく、ジプシー歌曲集のなかの一つだそうです。だとすれば「ジプシー」の人たち（今日EUでは「ロマ」と呼ぶべきだと思います）と僕たちは同じ心です。

3. グリーンズリーブス イギリス

民謡 ボーン・ウィリアムズ

ピアノとヴィオラで演奏されました。胸きゅんです。懐かしくしみじみと好い曲です。幼いころいつ最初に聞いて覚えたのか分からないほど、みんながよく知っているメロデーです。女性に振られた男性の失恋の歌だと言われるととても意外です。ボーン・ウィリアムズもその内容や面白い伝説など踏まえて、後世の人たちはその底に流れている民族の精神に靈感を受けて自分の創作を完成させているのですね。「西部開拓史」という邦題のアメリカ映画で、挿入歌（主題歌とも言わ

れる）として用いられています。原題の直訳は「どのように西部は開拓されたか」ですが、物語は三世代、数十年に及ぶある家族のファミリー・ヒストリーです。新天地を求めて、お父さんが幌馬車のたずなを取って一家は、西へ西へと移動します。移動の途中、筏での川下りを強いられて、激流に流され滝から落下、家族を失ったり、それから南北戦争で戦死した人もいます。悲しいことや大変なことがいろいろありました。曲名は「牧場の我が家」となって、詞も変わっています。先ごろ亡くなられたのですが、映画に出演した若く、美しいデビュー・レイノルズが歌っています。ストーリーでは男女の再会の場面が出て来ます。船の中の舞台で歌手である彼女がこの曲を歌っている声を聞いて、彼女が彼女を見つけ出すというものです。（以下 次号へつづく）

広島県知事表彰受賞

理事 谷口了子さんが、10月21日に「多年にわたり社会福祉団体の役員として社会福祉事業の発展に尽くされましたその功績をたたえ表彰します」として知事表彰を受章されました。

谷口さんは、平成13年7月から評議員を務め、平成15年7月からは理事を務められています。

ご寄付お礼

令和元年6月から令和元年10月までに、次の皆様から貴重なご寄付をいただきました。ご厚志、誠にありがとうございました。

- 大上 瑞 香 様
- 志水 清内 様
- 向井 宏子 様
- 北本 クニエ 様
- 谷増 栄 様
- 桑原 キヨコ 様
- 古川 早智子 様
- 奥野 静子 様
- 川本 勝之 様
- 榎 寄 昭夫 様

ご寄付いただく際には、左記の口座へお振り込みください。

ゆうちょ銀行  
振替口座 0130001618858  
一般財団法人 広島県動員学徒等犠牲者の会

あとがき

今年の終戦の日の8月15日の新聞のインタビュ記事で、戦争など命をテーマにした著書多数の作家「柳田邦男」さんが次のように語っておられます。

『現在の政治の中心を担うのは、戦争を体験したことがない戦後生まれの世代になった。国の圧倒的大半を占める戦後世代の怖さは、理屈や机上の理論で戦争を考えることにあ

る。戦争を経験した過去の政治家は、「戦争だけは絶対にしてはならない」という信念を持っていた。悲惨な現場を見たがゆえの拒否感が、血肉として染みついていった。

私の9歳の時の、身に迫る空襲の恐怖体験は、命について考え戦争を絶対に拒否するという生涯活動の原点になっている。

戦争を阻止するには、大切な人の命を突然、理不尽に奪われた悲しみを経験した人々が次の世代に伝え、共有していくことが重要であり、かつ責務だと思う。伝えることにより、単に「何人が死んだ」という「数字」ではなく、一人一人の大切な「命」として実感でき、（伝え聞いた人々は）同じような不条理な死を、二度と出さないと思えるようになる。平和な社会はそうやって作られる。

戦後74年がたち、これまで必死に語り部をしてきた人たちが高齢化で次々と亡くなっている。全ての世代に「継承」という重い課題が残されている。

現在当会には、被爆者証言伝承活動に取り組んでおられる方が3名いらっしゃいますが、一年を通して、全国各地へ精力的に伝承講話活動をしておられます。柳田さんのおっしゃる、被爆者証言を聞き、悲しみを共有し次の世代に伝える責務を、進んで実践されているのだなど、頭が下がる思いがします。（本地正治）